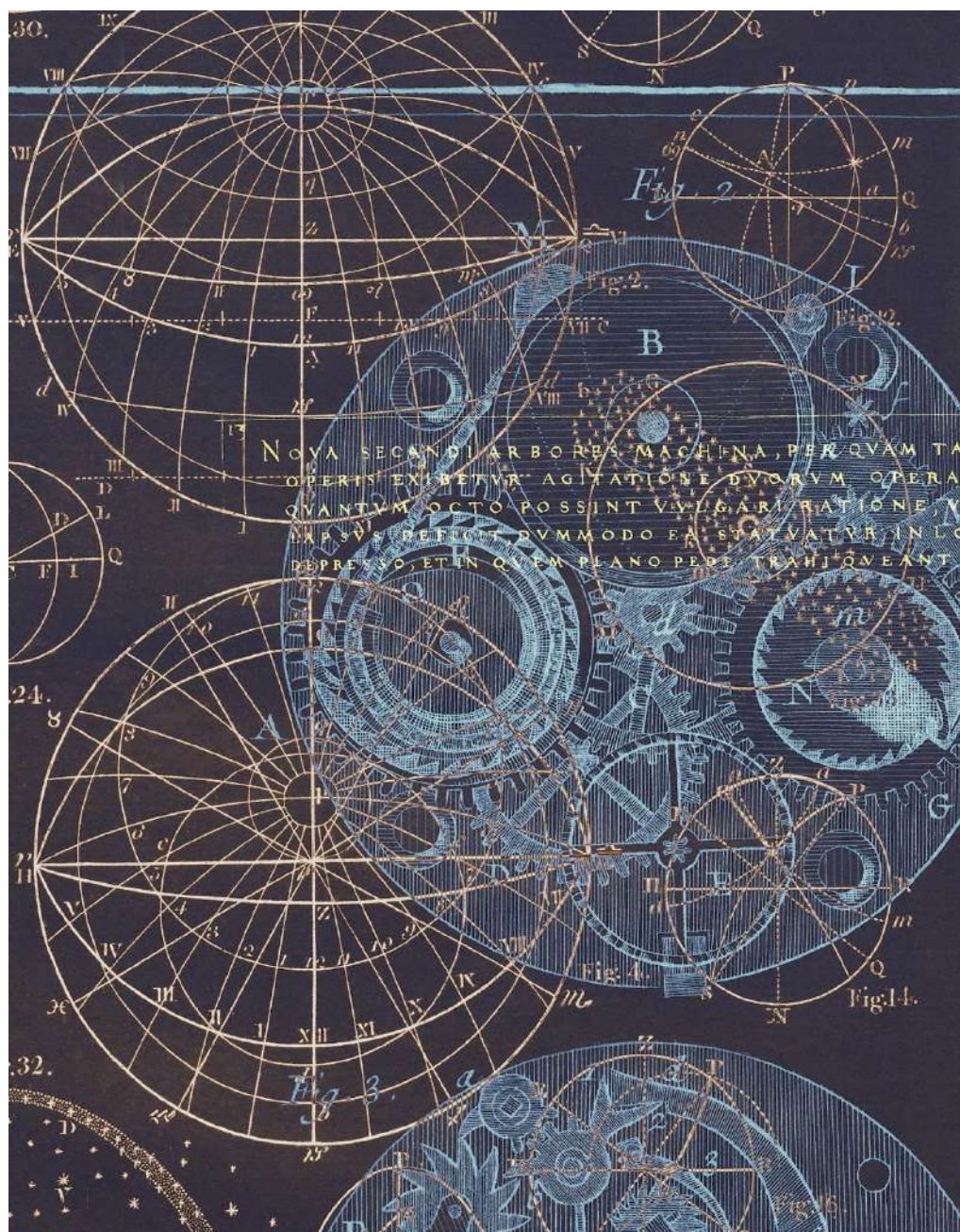

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 283

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5641. 穏やかな土曜日の朝に:久しぶりに和書を読んで
- 5642. 本日の接心を振り返って
- 5643. 今朝方の夢
- 5644. 素晴らしく晴れた日曜日に
- 5645. アテネ旅行の延期
- 5646. 音の海を振動して進む音:画集を眺めること
- 5647. 変貌と万物の流転:今朝方の夢
- 5648. アテネ旅行の予約変更:作曲に伴うゲーム性
- 5649. 「発達の商品化(developmental commodification)」について
- 5650. あの星の名前:愚かで未熟な人間
- 5651. 羽田空港の「新飛行ルート」について
- 5652. オランダのアマゾン:自己防衛の必要性
- 5653. コロナウイルスの蔓延を象徴する今朝方の夢
- 5654. スーパーの前で遭遇した珍しい光景
- 5655. フランソワ・クープランと作曲家の身体感覚のトレース
- 5656. 今朝方の夢
- 5657. 光合成を始める身体:素晴らしき1日の終わりに
- 5658. 麗かさを感じる日々:AIと作曲及び絵画
- 5659. 理論書との付き合い方の変化
- 5660. 頭を空っぽにすること:メンデルスゾーンと小鳥たちの鳴き声

5641. 穏やかな土曜日の朝に:久しぶりに和書を読んで

時刻は午前9時半を迎えた。今日は早朝から素晴らしい青空が広がっていて、清々しい気持ちになる。微風が漂い、裸の木々の枝を揺らしている。

今日は休日ということもあり、そしてコロナウイルスの蔓延に伴い、いつも以上に外に人はいない。通りを走る車の数も人の数も非常に少ない。今社会では、人々がコロナウイルスに対して右往左往しているが、世界そのもの、すなわち裸体としての物理的自然世界そのものは以前と何ら変わりなく、静かにそこにたたずんでいる。今回のコロナウイルスは自然の猛威というよりも、人間の狂気が猛威を振るい、それが今のような混乱を引き起こしているのではないかと思う。

先ほど、今日は久しぶりに和書を読もうと思った。そこで、森有正先生の日記を本棚から取り出し、それを読み始めた。挟んであったしおりを取り外し、続きのページの書き込みを見たところ、前回読んでから4ヶ月ほど間が空いているようだった。そこから数ページほど食い入るように日記を読み進めた。

そこでパタリと読書が止まり、どうも日本語が内側に入ってきた感じがした。これは森先生の日本語の問題ではない。そもそも森先生の書かれる言葉は、私の内側に入ってきた感じがする。いやそれどころか、自分の奥深くに染み込んでいく。そうしたことから、先ほど日本語が内側に入ってきた感じがする要因は別のところにありそうだ。

このところは、学術機関に所属していた時のように、大量の英文書籍と英文論文を読んでいた。そうしたことも何か影響を与えているのだろうか。自分にとっては、英語空間に浸る方がひよっとすると日本語空間でそれを行うよりも容易なのかもしれないが、今日は英文についてもあまり読みたくない気分である。こういう日は、文字から離れ、作曲実践を楽しんだり、画集を眺めることを楽しむに限る。

ちょうど今日は午後から接心をする予定なので、文字から離れることができる。接心の前には心身をほぐし、くつろがせるために、踊りを踊ろうと思う。その際には、グスタフ・レオンハルトの演奏するバッハの音楽をかけようと思う。接心後に曲を作るかどうかは未定だが、その時の状態を見て、俳句

のような短い曲を作り、座禅を通じて得られた事柄を音化してみるのもいいだろう。夜はバッハやシューマンを参考にしながら原型モデルを作ったり、好きな画家たちの画集を眺めたりする。

それではこれから、作曲実践の続きに取り掛かりたい。ここからは理論書に掲載されている譜例を参考にしていく。理論に関する説明書きを読むというよりも、実際に音を作曲ソフト上に配置し、それを聞いていくことを通じて概念を身体的に把握していく。言葉の世界に入り込んでいくのではなく、純粹に音の世界に入り込んでいく。そしてそこから音の世界を捉えていく。そうした意識でここから作曲実践を行いたい。フローニンゲン:2020/3/21(土)09:49

5642. 本日の接心を振り返って

時刻は午後7時半を迎えた。今、フローニンゲン上空の空はエメラルド色に輝いている。雲ひとつなく、透き通った空が1日の終わりを祝福するかのように輝いている。

この時間帯でも完全に日が暮れていない姿を見ると、随分と日が長くなったものだと思う。

今日は午後に、予定通りに数時間ほど接心を行った。合計で4時間ほど座っていただろうか。今日は天気が良かったから、書斎の床にヨガマットを敷いて、時々身体に太陽光を当てながら座っていた。前回長時間座ったときには、魔境に入り込んでしまうような知覚体験をしたが、今回は平穩無事であった。

自分が大切に思う人たちの無意識とつながるような感覚があったり、随分と昔の幼少期の頃の記憶がいくつか思い出された。とりわけ過去の記憶に関して言えば、これまであまり思い出したことがなかったような記憶が蘇ってきたこともあり、それに囚われないようにしながらも、幾分関心を持って眺めていた。

今回の接心において、何か大きな気づきや発見が得られたかというところでもない。元々そうしたことは求めず、求めていたものがあるとするならば、意識の深まりに応じて、大切な人たちの治癒と変容の触媒になることぐらいだった。それと自分自身の便益で言えば、文字空間から離れ、思考を休めることぐらいだろうか。それらの目的に関しては十分に果たせたように思う。

今朝方の日記で書き留めたように、来週の木曜日に予定していたギリシャ旅行が延期されたことにより、来週末もまた今日ぐらいの時間座ってみようかと思う。あるいは、ここからは土曜日の午後は数時間ほど何もせず座ってみようかと思う。仮に太陽の姿が拝めれば、ゆったりと日光浴がてら座るのも悪くない。文字空間からしばらく離れたことに伴い、脳に十分な休養を与えることができた。明日からはまた読書を再開していこう。

今日はこれからもう少し時間をとって、バッハの曲を参考にしながら曲の原型モデルを作っていく。本日作成した原型モデルは、明日の作曲実践で活用していく。バッハの手ぐせ、すなわち彼の作曲語法を感覚的に辿るように音を再現していく。そのプロセスそのものの中にも楽しさと喜びがある。

明日は今日以上に晴れのようなので、日光浴のみならず、夕方あたりに街の中心部のオーガニックスーパーに散歩がてら立ち寄ろうと思う。本日もとても充実した1日であった。明日もまた今日と同じだけの、いや今日以上に充実した1日になるだろう。フローニンゲン:2020/3/21(土) 19:36

5643. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今、フローニンゲン上空の空は淡いラベンダー色に染まっている。そのような空を鳥たちが優雅に舞っている。

今朝は風がなく、空には一つも雲がない。小鳥たちもそうした状態を喜んでるかのよう澄み渡る鳴き声を上げている。

天気予報を見ると、今日から4日間連続で快晴マークが出ている。今日からの4日間はほとんど雲がなく、日光浴を楽しむにはうってつけだろう。一方で、今日からの4日間の最低気温は軒並み低く、マイナス2度以下の日が続く。今日の起床もゆったりと5時半ぐらいだったのだが、起床してしばらくすると、もう日が昇り始めた。

早いもので、来週末の今日からはサマータイムに入る。ここで1時間ほど時間調整がなされることになり、ここ最近の日の出や日没の時間を踏まえればそれも納得がいく。

淡いラベンダー色に染まった空から、何か良い香りが漂ってきそうだ。その香りを想像しながら今朝方の夢について振り返りたい。

夢の中で私は、実際に通っていた中学校とは異なる中学校の教室にいた。私が住んでいた町には、通っていた中学校以外にも国立大学の附属中学校があった。私が通っていた小学校からも、その中学校の入試を経て入学する友人が数名ほどいた。どうやらその日は、その中学校でアートに関するイベントか何かが行われていた。それは小中学生向けのものではなく、大人向けのものであった。

私はある教室の中において、そこで絵を描いていた。夢の中の私は駆け出しの画家であり、水性色鉛筆を用いて、好きなように絵を描いていた。私の周りには、私が絵を描く姿を眺めている人たちが何人かいた。その中に、私が尊敬する画家がいた。私は絵を描くことに集中していたのだが、その画家の方がいることに気づいていた。その方が私の描く絵を眺めていることは知っていたが、それを気にすることなく、意識を絵に向けていった。

私は茶色と水色を使ってモチーフの輪郭を描いていき、そのモチーフをまたそれらの色で塗って行った。モチーフと言っても何か具体的な形のあるものではなく、私の頭の中から生み出される抽象的なものだった。描かれていく絵がどのようなものなのかについては自分も関心があり、徐々に形になっていく絵を眺めながら絵を描いていくことは快感であった。

絵が無事に完成すると、尊敬する画家の方が最後まで私の描く姿を見届けてくれており、そこで少し会話をした。すると、今回のイベントの案内役を務める2人の男性が教室に入ってきて、私たちを案内してくれると述べた。その画家の方も絵を出品しているようであり、校舎の1階で絵や画集を販売しているようだった。2人の案内役の男性たちに導かれる形で教室を後にし、しばらく歩いていると、教室に忘れ物をしてしまったことに気づいた。私は彼らにそれを伝え、先に行ってくれと述べた。

教室に戻ると、学校に来る前か学校の中でかわからないが、どこかで購入した書籍が数冊ほど机の上に置かれていた。それらの書籍は一冊一冊の分量が多く、想像以上に重かった。その日はちょうどカバンを持ってきていたので、私は黒いカバンにそれらの書籍を詰めた。

ふと教室の左隅の机の上を見ると、そこに携帯の充電器のようなものが置かれていて、それが自分のものだと分かった。しかし、もうカバンに入らなそうだったので、それはそこに置いていこうかと思った。だがもう一度考え直し、カバンの余白を作り、そこに充電器を詰め込んだ。そこでようやく教室を後にし、随分と長居をしてしまったと思った私は、3人を追いかけるために走り出した。

校舎の1階に辿り着くと、確かにそこで尊敬する画家の方の画集や作品を購入できるようだった。ちょっと画集を購入したいと思ったが、時間がなかったので、3人を追いかけるために購入を断念し、校舎を後にした。

その学校は海沿いにあり、学校までの道は少々入り組んでいた。道が直線ではないため、3人の姿が確認できず、走る速度を早めた。ある箇所のカーブを曲がったときに、遠くの方に画家の方の後ろ姿が見えた。その方の後ろ姿が見えたところで安心し、そこからは早歩きで追いかけることにした。

ふと視線を落として自分の靴を見ると、自分はランニングシューズを履いてきており、動きやすい靴を履いてきて良かったと思った。そこで夢から覚めた。実際には、この夢の前にもう一つ別の夢を見ていた。その夢には、ちょうど上記の中学校に編入した女性友達が登場しており、彼女と色々話をしていたのを覚えている。また、上記の夢の中で出てきた画家の方に関して言えば、昨日数時間の接心をする前に、その方の画集を眺めていた。接心及び夢を通じて、その方の無意識とつながったのかもしれないという考えが脳裏をよぎる。フローニンゲン:2020/3/22(日)06:57

5644. 素晴らしく晴れた日曜日に

時刻は午後8時を迎えた。今週末も終わりを迎え、明日からは新たな週を迎える。それにしても今日は本当に天気が良かった。文字通り、雲一つない快晴の空が広がっていて、久しぶりに強い日差しを感じたように思う。

午後には日光浴を書斎で楽しみ、夕方には街の中心部のオーガニックスーパーにジョギングがてら買い物に出掛けた。街の中心部に出かける途中ですでに気づいていたが、やはり街がとても閑散としていた。それはもちろんコロナウイルスの影響である。いつもは日曜日であれば、街の中心部

は賑わっているのだが、今日は全くそのようなことはなかった。スーパーに到着すると、店には張り紙が貼ってあり、それはウイルスの予防の仕方に関するものだった。

オランダ語で書かれていたので即座に全て理解できなかったが、要点は他者と1.5m以上の距離を保つことであり、その他にもいくつか注意書きがあった。店の中でも対策がなされており、これまではなかったのだが、レジでは店員と客がプラスチックの板で仕切られるようになっていた。おそらくそれはくしゃみや咳、さらには唾液などが飛び散らないようにするためのものだと思う。そのスーパーを訪れた後、もう一件自宅近くのスーパーにはしごしたときにも同じ仕切りがレジにあった。オランダはEU圏内の中でも感染が進んでいる方の国なので、今国を挙げて対策がなされているようだ。

今日は太陽が燦然と輝くような1日だったが、道路を見ると、所々白い霜のようなものが見えた。太陽の光をたっぷり取り入れた今の室内は暖かいが、深夜にかけては部屋の気温も下がる。明日の未明には、マイナス2度まで気温が下がる。まだまだ寒さ対策を忘れないようにしよう。

今日もまた作曲実践に打ち込む1日だった。これからは集中的に音楽理論の書籍を読んでいこうと思う。その際に、絶えず譜例を作曲ソフト上で再現する。再現するだけでなく、その譜例を元に自分なりの曲を断片的でもいいので作っていく。理論を頭だけで理解することは、作曲においてはほぼ不可能であり、必ず身体感覚に浸透させた理解が必要になる。そうした理解を実現させる方法が、まさに音の再現とそれをもとにした実際の作曲実践である。

ここ最近では、原型モデルを作成するときには、調性も含めて、いったんは忠実に再現することを行っている。その後、原型モデルの曲を聴き、それに応答する形で自分の曲を作っている。今後もこれを続けていきたい。

忠実に曲を再現する過程の中で、作曲家固有の作曲語法を感じることができる。それは紛れもなくその作曲家の固有の感性から生まれたものであり、唯一無二のものである。その人固有の文体と同じく、それは作曲家の実存と深く結びついている。文体の深まりは、実存的な側面の深まりと言えるかもしれない。

今後も様々な作曲家の作曲語法に触れ、それらを深く感じ取る実践を継続させていき、その過程の中で自分の実存的側面と感性を育てていく。その先に、唯一無二の自分の作曲語法が築き上げられていくはずだ。フローニンゲン:2020/3/22(日)20:15

5645. アテネ旅行の延期

時刻は午前5時を迎えた。今朝の起床は4時半前であり、早くも遅くもなく程よい時間に起床した。これくらいの時間に起床することができれば、朝の時間を含め、夜まで自分の活動に打ち込むだけの十分な時間がある。とりわけ午前中の時間というのは、創造活動や読書にうってつけの時間となる。太陽の日は沈んでしばらくしてから就寝し、太陽の日は昇り始める前に起床すること。こうしたリズムは自然のリズムと調和しており、自分に大いなる力を授けてくれている。

昨日と同様に、今日も晴天のようだ。天気予報を見ると、今の気温はマイナス1度と低いが、今日も曇りマークの一切ない快晴マークが付されている。

フローニンゲンもまたオランダの他の都市と同様にコロナウイルスの渦中にあるが、季節は着実に新たな方向に向かっている。今日もまた日中に日光浴を楽しもう。その際には、太陽の光を浴びながら、過去の偉大な作曲家が残した手紙集を再読しようかと思う。このところは日光浴と読書がセットになっており、それはとてもいい組み合わせだ。

昨日街の中心部に出掛けたとき、確かに街中は閑散としていたが、住宅地を通った際に、各人が家の庭や軒先で日光浴を楽しんでいる姿が散見された。オランダの家の作りは興味深く、家には庭だけではなく、入り口のドア付近に木造のベンチがあつたりする。そこに腰掛けて日光浴を楽しんでいる人たちを見かけた。その他にも、自宅から椅子を引っ張り出してきて、外で太陽の光を浴びながら新聞や書籍を読んでいる人もいた。天気が優れず日照時間の短い時期が続くオランダにとって、人々のそうした行動は生活の知恵なのだと思う。

生活環境と過去の体験の知恵がそうした行動を生み出す。そしてそれは、心身の健康を保ち、育む上で重要な知恵である。このあたり、人々は今回のコロナウイルスの体験を経て、どのように行動が変わるのだろうか。仮に意識が変われば行動が変わるだろう。しかしながら、今回の一件が、人々の意識を麻痺ないし抑圧するものであれば、人々の行動は何も変わらないのかもしれない。

人間は本来体験を通じて学ぶ生き物のはずであるが、その体験がいかなる意識作用をもたらすかによって、人々は体験から何も学ばず、行動が一切変わらないということも起こり得るのだろう。

昨夜メールを確認したところ、アテネのホテルから連絡があった。金曜日の夜にホテルにメールをしていたところ、その返信があった。幸いにも、宿泊のリスクが可能とのことであった。最初私は、すでに宿泊料を払っており、それが全て無駄になってしまう可能性も考えていたが、ホテル側の対応にはとても感謝している。どうやらギリシャ政府はさらに措置を厳格なものにし、アテネの全てのホテルが先日からしばらく休みとなったとのことである。今回のウイルスの蔓延は、観光産業や鉄道・航空産業に大きな打撃を与えてしまっていることもあり、ウイルスが落ち着いたら、それらの産業に対する微々たる応援の意味も含めて、積極的に旅に出掛けたい。

リスクに際して、最初4月末を考えたが、コロナウイルスがいつ落ち着くのか読めないこともあり、アテネに行くのは5月末にした。4月中には状況を見て、オランダ国内の日帰り旅行を行い、ピエト・モンドリアンの美術館に足を運ぶ。オランダには2つほどモンドリアンの美術館があり、どちらに行くかはまた後日考える。仮に2つの美術館が近ければ、片方の美術館周辺に一泊し、翌日もう一つの美術館に足を運ぶのも良いだろう。5月末のアテネの旅行が終われば、そこからまた少し時間を空けて、8月の中旬あたりにスイスのベルン、アスコナ、ドルナッハの3都市を巡る旅行に出かけようかと思う。年内はあと一つ、10月の中旬に日本に一時帰国しようかと考えている。

本日行うこととしては、昨日ホテルにリスクの具体的な日にちをこちらから提示したので、部屋が確保できれば、航空会社に連絡し、フライトの予約変更をしたい。アテネのホテルにせよ、ギリシャの航空会社にせよ、今回の一件に対して迅速に対応してくれたことには大変感謝している。フローニンゲン:2020/3/23(月)05:30

5646. 音の海を振動して進む音:画集を眺めること

時刻は5時半を迎えた。おそらくそろそろ小鳥たちが鳴き声を上げ始める頃かと思う。そのように思っていたら、本当に今小鳥たちが鳴き声を上げ始めた。闇に包まれた静寂な世界に小鳥たちの鳴き声がこだまし、どこまでもその音が伸びていくかのようなようである。音の振動というのは一体どこまで伸びていくのだろうか。

仮に世界が音の海であるならば、一つの音は音の海の中を振動しながらどこまでも伝わっていくのかもしれない。ああ、それは音の縁起なのだろう。

一つの音はそれが発せられるとき、この世界の充滿する音の海の中を通りながら様々なところに音を届けていくのだ。一つの音は、他の音や音ではない存在に影響を与えていく。仮に一つの音が消滅したとしても、それが与えた影響は不滅である。この現象はまさに人間存在と同じなのではないかと思う。

昨夜、就寝前に満天の星空を眺めながら、死という現象及び死後の世界のことを考えた。仮に肉体が消滅しても、その肉体を通じて生きる過程の中で他者に与えた影響に関しては不滅なのだろう。精神的なものはやはり不滅なのだ。

小鳥たちの鳴き声が教えてくれることは実に奥深い。世界の一つの側面として、この世界は音と振動で構成されているようだ。音にはそもそも振動が構成要素としてあるのだから、世界は何らかの振動によって構成されていると考えることができるかもしれない。現在は、コロナウイルスの猛威によって、その振動の波長が悪い。あまり好ましくない音と振動が世界に充滿している。それが人々の精神にどれだけ大きな影響を与えていることか。現象がいかなる性質の音と振動を持つのかは、人間の脳と意識に大きな影響を与える。そのように考えてみると、私たちの脳や意識というのは、音と振動を受け取る装置のようなものであって、同時に脳と意識は音と振動で構成されていると言えなくもない。

5時半を過ぎてくると、空がダークブルーに変わり始めてくる。ちょうど今週の日曜日からサマータイムを迎える。瞬間的にまたしばらくは日の出の時間が遅く感じられるだろうが、それもいつの日のことだろう。

昨夜は就寝前にオディロン・ルドンの画集を久しぶりに眺めていた。不思議なことに、早起きをして活動するのと夜更かしをして活動するのが同じ活動時間を持っていたとしても、その密度と質は、自分の場合、圧倒的に早起きをした方に軍配が上がる。

過去の偉大な創造者たちも早起きの人間が多く、彼らは午前から午後にかけて自分の取り組みに集中し、夜はリラックスをして早めに就寝していたことが特徴である。私も夕食を摂ってからは頭を

使うようなことは行わないようにしている。時折少々読書をすることもあるが、その集中力はやはり午前や午後とは比べ物にならない。夕食後や就寝前に読書を行うことは脳の酷使にしかならないのではないかと最近思っている。仮に読書によって眠気が引き起こされるのであれば、それは脳が読書という行為に拒絶反応を示していることの現れだろう。

人間の脳は、その時間帯に最適な活動に従事している時にはいつまでも働き続けるが、仮に好きなことをしていても、それが脳の状態に合致しない場合にはすぐに疲弊をし、活動に対して拒絶反応を示すというとても正直な器官である。

昨日眺めていた画集は、2年前にロンドンナショナルギャラリーとクレラー・ミュラー美術館で購入した2冊の画集である。画集には文字で解説がなされているが、そうした解説の文章を読むことをせず、ひたすら絵だけを眺めていた。

夜はとにかく言語野を活性化させることなくそれをくつろがせることにしたい。ただでさえ私たちは、日中言語野を自然と活性化させているのだから、就寝前ぐらいにはその活動を抑え、脳を休ませていくことが大切になるだろう。私にとって画集を眺めることは、作曲上のインスピレーションを得るためと感性を涵養するために不可欠だ。さらには、画集の絵だけを眺めることは、言語を介さずに、脳を休ませながらも同時に非言語的な感覚を司る脳の部位を活性化させ、その部位を育んでくれることにもつながる。

就寝前の踊りの前には、今後も画集を眺めていこうと思う。また、再来週あたりには、アテネ旅行の代わりとして、フローニンゲンの街の中心にある行きつけの古書店Isisだけではなく、美術書専門の古書店に立ち寄り、そこで自分を打つ画集を購入しようかと思う。もしかしたら、街の中心部だけではなく、運河沿いにもう1店ほど美術書専門の古書店があったかと思うので調べてみよう。フローニンゲン:2020/3/23(月)05:56

5647. 変貌と万物の流転:今朝方の夢

起床してから1時間半ほど経つが、早朝のヨガの実践と踊り、そして日記を書くことをしてこの1時間半ほどの時間を過ごしてきた。その間にもフローニンゲン上空の空は刻一刻と変貌を遂げている。

今、空は明るくなってきており、完全に日が昇るのも後少しだろうか。こうして刻一刻と変貌しているのは、何も空だけではない。私自身もそうした変貌する主体である。それは人間本質の一つであろう。人間という対象を超えて、このリアリティに存在する全てのものが刻一刻を変貌を遂げている。

変貌というのは存在の本質なのだ。全ての存在は千変万化し、そして流転する。自分の存在そのものと、その存在がなす行為とその影響は、果たしてどのように流転するのか。それらは何に転じていくのだろうか。

今聞こえてくる小鳥たちの清澄な鳴き声を一つ例にとってみても、それは流転し、私の内側に入ってきて、それが思考と感覚を私にもたらしてくれている。縁起でつながり、千変万化し、流転する存在というのは実に不思議だ。今日も様々な存在に支えられながら、自分という存在はその存在にとってできる限りのことをしていく。

それでは今朝方の夢について振り返りをし、その後、早朝の作曲実践に取り掛かりたい。日を追うごとに作曲実践の楽しさと喜びが増している。毎日何かしらの工夫をし、新しいことを絶えず試しているためか、毎日が本当に発見の連続であり、楽しさと喜びの連続である。夢の振り返りも、上述の話を踏まえれば、それは作曲実践に少なからぬ影響を与えているであろうことが推測される。

夢の中で私は、実際に通っていた大学のキャンパスにいた。生協前のベンチに腰掛けて、そこで友人と話をしていた。だがその友人は大学時代の友人ではなく、高校時代の友人(TN)だった。彼とは高校1年生の時に同じクラスであり、彼は文武両道の優秀な友人だった。彼と話をしていたのは、私たちが履修している経営学概論に関するものだった。

私は大学時代に経営学部にも所属しており、1・2年生の間に履修することが必須の経営学概論を確かに履修していた。それは履修が必須なだけであって、単位を取得することが必須ではなかったように記憶している。

私は経営学部を卒業していながらも、その授業の単位をおそらく取得していない。1年生の最初の学期にその授業を履修し、授業に出席したのは最初のクラスのみだった。その授業を担当していたのは労務管理論の大家の先生であり、せつかくそうした先生から教える良い機会だったのだが、研究を行う能力と教える能力はあまり相関関係がないのか、その教授の授業は随分と古風な形

式でなされており、初回以降のクラスに出ることをやめた。結果として、試験は受けたものの、単位を取得することができなかった。そのような思い出のある経営学概論のクラスについて友人としばらく話をしていた。

私はつくづく人から何かを教えてもらうことが苦手であり、幾分毛嫌いする性質さえある。アメリカやヨーロッパの大学では、教授と生徒との間でもう少し活発なやり取りがあるが、それでも窮屈さを感じてしまう。学術機関の中にさえ自分を満足させてくれる学びがないのであるから、一体どこに自分を満足させてくれる学びがあるのかと考えてみた時に、絶えずそれはアカデミックな世界の外にあり、そうした世界の外にありながらにして自分の内側にあるのだという考えが生まれてくる。

夢の中の私はぼんやりとそのようなことを考えていた。次の夢の場面では、3人の外国人が音と色の関係について話をしていた。その話は大変興味深く、1人の男性が、色のついた人形を用いて音を表現するという行っていた。厳密には、聞いた音に対して、ある特定の色のついた人形を手に取り、その人形の体を動かしながらその音を表現するという行っていた。

赤色の人形、黄色の人形、それと青色の人形に対してその男性は笑顔を浮かべながら、次々と音を表現していった。私はその様子を夢の箱の外側から楽しげに眺めていた。そして、「その音はその色を用いてそのように身体的に表現できるのか！」と大きな気づきを得て目を覚ました。フローニンゲン:2020/3/23(月)06:20

5648. アテネ旅行の予約変更:作曲に伴うゲーム性

時刻は午後8時を迎えた。今日も申し分ないほどの快晴であり、午後は日光浴を楽しんだ。明日からは、午後の仮眠の前に行う日光浴の際に、楽譜を眺めたり、読書をしたりすることを習慣にしたいと思う。

昨日アテネのホテルから連絡があり、それに対して返信をしたところ、そのメールに対して再度返信があった。ホテルの担当者曰く、アテネの全てのホテルが3/22から4/30まで営業停止となったそうであり、1ヶ月以上ホテルを営業できないというのは大きなことだろう。

5月からは営業再開となるらしく、5月末にスケジュールを変更してもらった。幸いにもホテルの部屋にはまだ空きがあった。

今日は航空会社にも連絡をしたが、なかなか電話が繋がらなかったなので、時間帯を変えてもう一度明日に電話をしようと思う。遅くとも明日か明後日中にアテネ旅行のリスケを完了させ、今週末には、この秋に日本に一時帰国する際の航空券を予約しようかと思う。去年は帰国の2、3ヶ月前に予約をしようと思ったところ、思うようにフライトが確保できなかったなので、今回は半年以上前から予約をする。これくらい前であれば望むようなフライトを予約することができるだろう。

ここ最近では、哲学書を読んで、音楽を作る日々が続いている。様々な領域の哲学書を読む中で、それは日々の協働プロジェクトに活着しているだけではなく、作曲実践にも活着している。今後は、読んだ哲学書の中で興味深い概念に出会った際に、その概念をモチーフに曲を作ってみたり、概念から喚起される感覚をもとに曲を作っていくことを行ってみよう。

日毎に作曲実践を行うことの喜びと楽しさが増している。喩えは不適切かもしれないが、RPGゲームに熱中しているような感覚で音を生み出している自分がいる。誰かが作ったゲームの中で楽しんでいるというよりも、ゲームそのものを創り出し、そのゲームに登場する出来事を楽しんでいるかのようだ。新しい概念や作曲上の道具と出会い、経験値を蓄積させていく様子などがRPGゲームの性質と似ている。またその中毒性という観点においても似たものが多分にある。今後は作曲が持つゲーム性と芸術性の両方を高めていきたい。そこから関心がゲームの語源と歴史に及び、それらについても近々調査してみよう。

フローニンゲン大学で学習科学を探究していた時に、学習とゲーム、とりわけ学習にゲーミフィケーションの要素を取り入れる論文などを読んでいたことが作曲実践に活着している。作曲のみならず、日々の実践の中に楽しみと喜びを見出すというのは、そこにゲーム性を見出したり生み出したりしているからなのだと思う。

今日はこれから作曲上の原型モデルの作成の続きに取り掛かる。現在はバッハとシューマンの曲を参考にしている。夕食後にはこのようにして原型モデルの作成に集中し、次の日にそれらを活用

して作曲をするための下準備をしていく。こうした下準備をしていることが、翌日目覚めた際に、その日1日が充実したものであることを確信させてくれる。

1日の始まりと共に、すでに作曲の喜びがそこにあるのだ。そうした下準備をし、明日を楽しみにしながら就寝し、翌朝目覚めた際には、その日1日を生きることの楽しみを感じるという良いサイクルがここにある。フローニンゲン:2020/3/23(月)20:33

5649.「発達の商品化 (developmental commodification)」について

時刻は午前6時半を迎えた。もうこの時間帯の外の世界はすっかり明るくなっており、今、朝日が赤レンガの家々の屋根を優しく照らしている。

小鳥たちも穏やかな鳴き声を上げていて、世界は一見すると平穏だ。その一方で、コロナウイルスの問題は相変わらず長引いている。世界が落ち着きを取り戻すにはもう少し時間がかかるだろうし、今回の件を経た後の世界はきっと異なったものになるだろう。変容後の姿がいかなるものになるのかはわからないが、いずれにせよ、ウイルスの蔓延前の世界には戻ることができず、また違った世界がそこに広がっているに違いない。

昨日の日記で書き留めたように、今日は昼前あたりに航空会社に再度電話をし、フライトのリスクを行いたいと思う。ホテルに関してはもうリスクが完了しており、5月末は3月末に比べて観光のシーズンなのか、宿泊料金が少し上がっており、差額を支払うことにした。フライトに関してもその可能性があるが、いずれにせよ5月末に再度ギリシャに行く機会を得ることができて嬉しく思う。

思い起こせば昨年の夏はロシアのモスクワに行こうとしており、アムステルダム空港のボーディングゲートに到着してはじめて入国ビザが必要だということを知り、泣く泣くその旅は立ち消えとなった。その時に、ロシアと縁が結ばれるのは今でないと思い、改めてロシアを訪れる機会を現在待っている。しかるべき時が来れば、ロシアに足を運ぶことになるだろう。モスクワ鉄道の寝台列車でロシアをゆっくりと横断することも風情がありそうであり、ぜひいつか実現させたい。

昨日、利己的な射幸心ではなく、成熟した射幸心を持って生きることの大切さについて考えていた。人の心理として、幸運を得たいという気持ちは誰にもあるが、その気持ちがしばしば、他者よりも

幸せになりたいという心理状態を生むことには注意が必要だろう。他者との比較の形ではなく、むしろ他者と共に幸福を育んでいくというようなあり方とアクションが実現される世界の到来を望む。それは現代の世界の有り様と人々の精神構造を持ってしては土台不可能な話だが、数百年後、あるいは数千年後の人類であればそうした生き方が可能かもしれない。

そのようなことを考えながら、「発達の商品化 (developmental commodification)」あるいは「人間の商品化 (human commodification)」という現象について考えていた。これまでも発達測定に関してAIを活用したプロジェクトに声が掛かることがあったが、それに協力する道を選ばなかったのは、仮に発達測定がAIで自動的に行えるようになった後の社会の姿を想像していたからである。端的には、その肯定的な面よりも否定的な面が表に現れることを危惧していたのである。まさにそれは、発達測定を通じて、発達という現象が他の消費財あるいは高級嗜好品などと同じような形で商品化されることを恐れ、それによって人間が商品化する事態を危惧していたからである。

だが後者に関して言えば、もうすでにそれは遥か昔から企業社会の中で起こっていることである。明示的・非明示的に、企業人は諸々の数字で評価・測定されるという商品化の産物に成り下がっていることは、今に始まったことではない。それは企業社会だけではなく、企業社会と癒着した学校社会においても同様のことが起こっている。そこでなされる各種のテストや試験を通じた数字による評価の仕組みは、人間を商品化することに加担している。

経済学者かつ社会学者のソースティン・ヴェブレンがかつて『有閑階級の理論』の中で提唱した「金銭的競争 (pecuniary emulation)」という概念は、依然として現代の企業社会に当てはまっており、その概念は形を変えて発達現象にも当てはまっている。

発達とは本来その進捗度合いを競争するようなものでは決してなく、高度な段階に到達することは競走レースではない。だが、発達という現象すらもが競争という俎上の上に乗っているような事態が訪れている。また、ヴェブレンが提唱したその他の概念として「誇示的消費 (conspicuous consumption)」というものがあり、上述の発達の商品化と合わせて考えてみれば、現代人は虚構の成長物語の中で発達を商品化し、商品化された発達を獲得・消費することに躍起になっている。しかもそこには、上述のように他者との競争という概念が巧妙に入り込んでおり、高度な発達を遂げることがあたかもラグジュアリーを身につけることと同義であるかのように錯覚され、多くの場合、誇示

的な消費対象に成り下がっている。今回のコロナウイルスの件で再度はっきりしたが、人類の集合的な意識と知性は依然として未熟な発達段階に留まったままである。フローニンゲン:2020/3/24 (火)07:15

5650. あの星の名前:愚かで未熟な人間

たった今、洗濯機を回した。オランダに来てからはずっと週に2回ほど洗濯するというリズムがある。オランダにはアメリカと同様に、日本で見られるような洗濯物を外に干すという文化がなく、全て乾燥機を回すような文化がある。そのようなことを考えながら、昨夜就寝前に眺めていた満天の星空を思う。

昨日も改めて、フローニンゲン上空の星空が見事であることに驚かされていた。フローニンゲンはオランダでも大きい街のうちの一つであり、北部では最大の都市かと思う。もちろん人口の観点から言えば、日本の街と比べて人口は多くない。フローニンゲンの人口は20万人ほどなので、私の実家がある山口県で言えば、山口市という市レベルの人口だ。そのような街に現在住んでいるが、こうも星空が見事なものかと昨夜は感慨深く天空を眺めていた。数日前の日記で書き留めていたように、いくつか気になる星がある。それらの星の中でも、一際輝いている星があり、その名前がとても気になっている。

先般、ケンブリッジ大学出版から天文学の最新の知見が収められた図鑑的な学術書が出版され、それを購入することを以前より検討していた。先日街の中心部の書店に訪れた際にも天文学コーナーに行き、何か良い図鑑はないかと探していたところ、数冊ほど購入を迷うものがあった。近々何か一冊ほど天文学の書籍を購入して、あの星の名前を知りたいと思う。その星のことをもっと良く知り、親しくなりたいのである。なぜならば、その星を眺めた時に、その星を眺めている自分がはじめて存在するからである。わかりやすく言えば、その星があることによってしか存在しない自己がそこにあるのだ。つまり、その星と自己はある観点において一心同体なのである。いや、その観点すら取っ払ってみてもその関係は成り立つ。

存在論的に、自分がその星を認識したからその星が存在しているというのはおこがましく、物理的にその星は存在し続けているはずだ。だが、「自分が認識しているその星」であれば、それは確か

に自分がその星を認識しない限りは存在していないことになる。逆もまた然りであり、その星があるからこそ存在している自分がいるのである。そのようなことを考えながら昨夜は満天の星空を眺めていた。広大な宇宙に意識が溶け込んでいき、意識がどこまでも拡張していくかのような感覚。そして煌めく星々との衝突的出会いと合一がそこにあった。

先ほど洗濯機を回そうと思った時に、ふとした考えが芽生えた。私はこれまで人間の意識や知性の発達を探究してきた。人間の意識や知性について知ろうと思えば思うほど、人間というものがわからなくなる。人間について何を知っているかと問われると、この10年間ほど人間について探究してきたにもかかわらず、自信を持って語れることなどほとんどないのではないかと思う。だが、一つだけ自信を持って語れることがあるとすれば、人間は愚かであり未熟であるということだ。人間はいつまで経っても愚かで未熟な生き物であるということだけは自信を持って言えるかと思う。

今回のコロナウイルスに対する世界の人々の反応を見ていると、人間がどれだけ愚昧で未成熟かが様々な観点からわかるかと思う。もしわからなければ、それがそっくりそのまま愚昧さと未成熟さの証となる。そのようなことを考えながら洗濯機を回し始め、再び書斎に戻ってきた。人類史において、ある特定の時代だけが呪われていたのではなく、人間の歴史は過去から現在にかけて常に呪われている。人間はつくづく様々なものに呪縛された存在なのだということを、目の前の裸の木々が語りかけている。フローニンゲン:2020/3/24(火)07:42

5651. 羽田空港の「新飛行ルート」について

時刻は午前7時半を迎えた。引き続き、徒然なるままに日記を書き綴っている。自分の内側から言葉が自然に溢れ出している。内側から何かが形になって現れようとする現象は、ここ最近の作曲に関しても見られる現象だ。

先ほど、人間がいかにも愚かで未熟な存在かについて書き留めていたように思う。そこからふと、人間がどれだけ馬鹿かを証明するための命題を設定し、その命題に取り組んだ哲学者や思想家はいないのかと考えていた。おそらく、直接的にそのような命題に取り組んだ哲学者や思想家は存在していないかと推測されるが、多くの哲学者や思想家は命題の形を変えて、同様の証明に取り掛かり、同時代の人々に様々な警鐘を鳴らしてきたのではないかとふと思った。

この10年間ほど人間の心や知性がいかに発達していくかを探究してきたが、今の関心は、人間はどれだけ発達しない生き物なのかという点と、発達を阻害するメカニズムにより関心が向かっている。しかもそれは個人の内側の要因やメカニズムだけではなく、社会的な要因やメカニズムを射程に入れたものである。

現在日本のコロナウイルスの状況がどうなっているのかを調べたところ、それとは全く関係なく、羽田空港の「新飛行ルート」について知った。それはちょうど今週末から運用が始まるとのことだった。それはもちろん、航空産業の活性化と、日本中を飛行機で飛び回る利便性を考えた末に導入されたものだと思うが——政治経済的な利権がもちろん絡んでいると考えられるが——、そこには産業の活性化と移動の利便性以外の観点が欠落しているのではないかと思われてしまった。端的には、人々の心身の観点だ。新飛行ルートで飛ばされる飛行機の数はもちろん一気に増え、その何割かは、都心上空を低空飛行するらしい。

いつときの航空ショーであれば、そうした低空飛行を楽しむことができるかもしれないが、毎日そのような低空飛行の下で生活をする人間に対する配慮はあったのだろうかと疑問に思ってしまう。実際に、そのような低空飛行で飛行機が飛ぶ時には、その騒音に対して幼児が泣き出してしまうそうだ。感覚的に純粋な幼児は、そうした騒音に不安感を覚えたり、恐怖を感じているのだろう。それが幼児たちの心に与える影響、そして脳に与える影響は見過ごせないものがあるように思える。

毎日頻繁に低空飛行の騒音を聞きながら生活するというのは、絶えず戦場で生活するような心理状態を強いられるのではないかと危惧する。そうなってくると、都心部に住む人々の心身はますます蝕まれていき、ますます病んでしまうのではないかと想像される。これまで一時帰国するときは、大抵東京に数日間ほど滞在することがあり、毎回東京に足を運ぶたびに、人々の機械化・家畜化・ゾンビ化が進行している姿を目の当たりにしているのだが、今回の一件はそれに拍車をかけるようなものになってしまうかもしれない。

現在、音についての探究を進めているが、私たちが不快に思う騒音は、間違いなく脳と心に否定的な影響を与える。その影響が今後身体の次元や精神の次元で何かしらの病理として現れてくるのではないかと思えて仕方ない。

騒音をもたらす破壊的な力の問題と、小さな問題で言えば、落下物の危険性もある。年間、飛行機の機体から落下物が落ちることが数百件ほどあるらしい。もちろん、それらの落下物は全て小さなものであり、これまではあまり人が生活をしていない空の上での出来事だったのであまり問題になっていなかったのだろうが、今後都市部の上空を飛ぶということになると、この点もまた問題のように思われる。小さなものであったとしても、それなりの高度から落とされると衝撃性が高まってしまう。そのようなことをつらつらと考えていると、いつの間にか時刻は午前8時を迎えていた。フローニンゲン：
2020/3/24(火)08:02

5652. オランダのアマゾン: 自己防衛の必要性

洗濯機が一生懸命回る音が聞こえてくる。いつも洗濯機は1時間ほど回っているので、あと15分ほどしたら洗濯機が回るのが止まり、今度は乾燥機を回そうと思う。

今日はまだ早朝の作曲実践に取り掛かっていない。それはこれから行う。それはもう1日の最大の楽しみであり、それを行っていると時を忘れてしまう。作曲に伴う感覚は科学研究における実験の中で絶えず新たな発見を見つけているような感覚であったり、昨日言及したように、自分で作った壮大なRPGゲームを楽しんでいるかのような感覚だ。今日もこれから就寝までの時間、作曲実践に打ち込んでいきたいと思う。絶えず楽しみと喜びの海の中に浸ろう。

ここ最近購入した多くの書籍の初読がすでに終わっており、それらを再読してもいいのだが、もう少しこれらの書籍を寝かせよう。来月の初旬にまた大量一括注文するまでは、書物から一旦離れようと思う。

数日前に嬉しいことに、ようやくアマゾンのサービスがオランダで開始された。これまでも確かにアマゾンはオランダでも活用できたのだが、なんと書籍の販売がされていなかった。そうしたこともあり、いつも私は、イギリスやドイツのアマゾンを購入し、イギリスやドイツのアマゾンでは入手できない書籍についてはアメリカのアマゾンを活用していた。これまではドイツのAmazon Primeの会員だったのだが、数日前にオランダのアマゾンから連絡があり、オランダのアマゾンもAmazon Primeのサービスを始めたようなので、そちらに切り替えた。毎月の会員費がドイツのそれよりも安いことは有り難いが、言語が全てオランダ語である点がちょっと厄介だ。その点、ドイツのアマゾンは英語表示も可

能だったので便利であった。いずれにせよ、来月からの書籍の注文の際には、オランダのアマゾンを活用することが中心になり、そこで手に入らない書籍があれば他国のアマゾンを活用する。

大空を様々な鳥たちが優雅に舞っている。そこには様々な種類の鳥たちがいて、その中でも小鳥たちはやはり外的を警戒しながら空を舞っているのだろうか。小鳥たちを観察していると、絶えず警戒モードの中にいるようであり、頭を絶えず四方八方に動かして辺りを確認している。そうした行動特性は、捕食者に襲われないための彼らなりの防衛手段なのだろう。彼らにも気の休まる時間があって欲しいと望む。

一方で、私たち人間は防衛手段をきちんと持っているのだろうか。それは国防上の大きな問題だけではなく、小さなところで言えば、私たち一人一人の個人の身を守る問題として提起できる。発達理論の観点で言えば、私たちは自分の知識と技術のある領域から一歩外に出ると、完全に無防備な赤子のような存在になる。そして問題は、いかなる領域にもサイコパス、ソシオパス、詐欺師のようなプレデターがいることであり、私たちは自分の身を守る術を身につけておかないと、心身がいとも簡単に彼らに略奪されてしまう。残念ながら私たちは、そうした未熟かつ危険な世界に生きている。それに気づかないことや気づかせないような精神風土と仕組みが存在していることもまた残念なことである。

今の私にとって継続的な学習をすることは、もちろん個人的な好奇心や探究心に突き動かされたものだが、そのような世界で生きていく際の自己防衛的な側面も多分にある。自己を守る知識と技術がなければ、本当にいとも簡単に騙されてしまうだろう。心身の略奪と破壊が横行している社会の中に生きているという自覚をもう少し持つ必要があるように思えるのは私だけだろうか。私は別に性悪説を提唱しているわけでもなく、人間の可能性について探究している身から言えば、性善説を提唱したいぐらいだが、世間ではどうも未成熟な性善説的発想が蔓延しているように思える。フローニンゲン:2020/3/24(火)08:24

5653. コロナウイルスの蔓延を象徴する今朝方の夢

洗濯機が止まり、乾燥機を回し始めた。時刻は午前9時に近づいてきており、先ほどいつもとほぼ同じ時間帯に味噌汁を飲みながら一息ついていた。

もうしばらくしたら、カカオニブ、カカオパウダー、ヘンプパウダーを組み合わせたドリンクを飲む。そこには少々ココナッツオイルを加える。朝に口にする食べ物はりんご一個だけであり、消化活動に費やされるエネルギーは微々たるものである。昼はバナナ2本とバイオダイナミクス農法の4種類の麦のフレークを少量食べており、昼はそれだけで十分だ。

適量かつ良質な食事を摂ることが完全な習慣となって1年ほどになる。こうした食生活が始まったのは、思い起こせば1年前のパリ旅行の出来事をきっかけにしてのことだった。それ以降、食事を大きく変えたことにより、心身の良い状態が維持促進されている。

気がつけば、肉も魚も食べないヴィーガンになっている自分がいた。昨日、協働プロジェクトの関係で、シンガポール人の方と話をしたのだが、その方もヨガの実践をされておられ、アルコールを飲むか、食事で気をつけていることはあるか、などを尋ねられた。アルコールを飲まず、基本的には魚を含め、肉を食べないヴィーガンであることを伝えると、その方は質問する前から、私がアルコールを摂取しないことや肉を食べないことを察しているようだった。やはりそうした食実践の効果は、表情や声、発露する身体エネルギーに現れるらしく、一目瞭然だったのだろう。正直なところ、私も食実践を意識している人かそうでない人かは外見及び声質からすぐにわかる。

コロナウイルスの状況が改善している国もあれば、依然としてコロナウイルスが猛威を振るっている国があるようだ。私たちは今回の一件から学ぶことが多くあるように思える。全世界的な規模でこうした危機的状況に陥るといのはリーマンショック以来だろうか。今回の件が落ち着き、その後の世界はどのようになるのだろうか。良かれ悪しかれ、以前の景色とは異なる景色がそこに広がっている予感がする。この世界を取り巻く時代精神や諸々の仕組みはどのように変わっていくのだろうか。

そのようなことを考えていると、事実データの受け取り方にも意識の特性が反映され、歪みが生じることに絶えず注意をしなければならないと思った。今、世間ではコロナウイルスに関して諸々の情報が流されているが、情報データのソース及びその質を見極めていく眼を果たしてどれほど多くの人たちが持っているのかが気になっている。人間はそもそも知覚現象を自分の認識の枠組みに合わせる形で捉える性質があり、どのようなデータをどれだけ得るかというところに歪みが生じ、そのデータをどのように意味づけるかというところにも歪みが生じる。端的には私たちは、歪んだ世界の中で歪んで生きているのだ。これも自らの歪んだ認識が生み出した捉え方なのだろうか。いずれにせ

よ、私たちは絶えず何かしらの歪みを抱えた世界の中で、認識上の歪みを経験しながら生きていることは間違い無いだろう。そして、こうした歪みが個人や社会に思わぬ形で大きな傷を残すことになる。

そのようなことを考えながらふと、まだ今朝方の夢について振り返っていないことを思い出した。夢について簡単に振り返りをし、そこから作曲実践を始めよう。

夢の中で私は、大荒れの海原に浮かぶ船の中にいた。嵐の水が船内に入ってこないように、扉はしっかりと閉まっていたが、それはどこか現実世界のコロナウイルスによる隔離生活を彷彿される状況であった。

嵐の力がより強まってくると、船内にいた友人たちが扉が開かないように必死に抑え始めた。特に一生懸命にそれを行っていたのは、小中学校時代の2人の友人だった。彼らの姿を遠目で見ながら、私は隣に座っていた見知らぬ中年夫婦と話をしていた。旦那さんの方が突然、地方のある私立大学の特定学部の偏差値が異常に高いことに疑問を持っていると述べ始めた。

彼はその大学を幾分中傷しており、それに対して奥さんがそのようなことを大きな声で述べてはいけなと旦那さんを諭していた。そこで私は、その大学のある学部の偏差値が異常に高いカラクリについて統計学的に説明することにした。船内にホワイトボードがあったので、それを用いてそのカラクリについて説明を始め、そのカラクリを示す決定的な数式の意味を噛み砕いて説明した。すると、小中高時代の友人(SS)がその数式の意味に対する私の説明にあまり納得行かないようであり、幾分不審な表情を浮かべながらいくつか質問をしてきた。それらの質問に対してもわかりやすく説明しようと心掛け、回答をしたところで、私の体は船内の別の場所にあった。ちょうど私の前を、小中学校時代に一番背の高かった友人(YK)が通りかかり、私は彼に話しかけた。

船内で監禁生活を送っていた私たちは、何か面白いことはないかと探しており、そうした生活を送る中で発見した人間特性について語り合うことにした。その船には、様々な人たちが乗船していたこともあり、人間観察を通じて得られた発見事項は数限りないものがあつた。

しばらく熱中して彼と話をしていると、気がつけば私は見知らぬカフェにいた。そこは欧州のどこかの街にある落ち着いたカフェだった。ふと左隣を見ると、小中高時代の女性友達(NI)が座ってい

て、テキストを広げながら何かの勉強をしていた。そう言えば先ほどの船内でも彼女を見かけ、彼女は腕立て伏せとストレッチを合わせたような体操をこれから行おうとしており、私の友人(YU)が彼女の髪留めのゴムを外してあげようとしていたのを覚えている。むしろそうしたストレッチをする際には髪を留めておいた方がいいのでは無いかと思ったが、なぜか私も彼女も、そして友人も、髪留めのゴムを外すことが最善であると認識していた。

そのようなことを思い出しながら、横に座っている彼女に話しかけた。何の勉強をしているのかとても気になっていたのである。結局何について勉強しているのかわからないまま、夢の場面が変わった。いや、おそらくそこで夢から醒めた。

最初の夢において、嵐が象徴しているものは、やはり現在のコロナウイルスの猛威だろうか。そして、船内での監禁生活は、コロナウイルスによる現在の隔離生活を象徴しているように思える。今日も目の前の通りを行き交う人の数は少ない。フローニンゲン:2020/3/24(火)09:20

5654. スーパーの前で遭遇した珍しい光景

時刻は午後8時半を迎えた。今日も静かに1日が終わりに近づいている。

今日は夕方に面白い光景に出くわした。それを面白いと言ってしまうと不謹慎かもしれないので、珍しい光景と遭遇したと述べておきたい。

夕方に近所のスーパーに行ってみると、スーパーの入り口から人々が等間隔の距離を置いて列を成していた。一瞬何事かと思ったが、今の世界の状況を考えてみたときに、それが何かはすぐにわかった。

スーパーに入る際に、コロナウイルスの対策が行われていたのである。最初私は、入場制限でもしているのかと思い、「ここはディズニーランドかっ！」というツッコミをしたくなった。珍妙な光景に思わず笑みがこぼれ、私は列の最後尾についた。

列に並ぶ人たちは、皆律儀に1.5mほどの距離を空けて立っている。スーパーの入り口に特設の手洗場が設けられており、2人の従業員が客を先導し、手を洗ってから店内に入ることを促している。

近所のスーパーのJumboは、Albert Heijnと並んでオランダの2大スーパーであり、さすがの対応であると思った。

列に並んでいる人たちがゆっくりと手を洗い、店内にゆっくりと入っていく。客の誰も焦ることも苛立つこともなく、こうしたことが日本で起こると、日本人は世界的に見てもせっかちな性質を持っているため、ソワソワする人が少なからずいるだろうということを考え、またしても笑みがこぼれた。

思い返してみると、オランダにやって来た当初、夏の時期に運河を架ける橋が船の進行のために上がり、船が通り過ぎるまでしばらく待っておく事態に遭遇した時に、日本人のせっかちな特性が自分の中にまだ多少なりとも残っていたことを懐かしく思う。

アメリカから直接オランダに引っ越しをしていれば少しは違ったのかもしれないが、日本でも有数の忙しい街である東京で1年間過ごしていたため、せっかちな性質がまた顔を出していたのだと思う。そのようなことを思い出していると、手を洗う順番がやって来て、石鹸でよく手を洗い、店内に入った。店内は予想以上に空いており、カゴを取る場所でも店員が待機しており、買い物を終えた客がカゴを戻す都度、取っ手の部分を殺菌ペーパーで拭いていた。こうした状況においても、オランダの店員たちは陽気に働いており、その姿が心に残っている。いつでも心の余裕を忘れないというのが彼らの国民性なのかもしれない。

今回、スーパーの入り口にできた列で待ちながら、マインドフルネスな状態で一步一步前に進むという形でスーパーに入ったが、それは初めてのことだった。今回だけではなく、今後もマインドフルネスの状態ですーパーに入れということを伝えようとする出来事なのかもしれないと考えてしまうほどだった。そのような出来事が本日あった。

今日も昨日と同様に、1日を通して見事な快晴が広がっていた。今夜もきっと星空が綺麗だろう。明日もまた快晴のようなので、午後には書斎で日光浴をしたい。今日は午後の仮眠の前に日光浴をしながら楽譜を眺めていた。ぜひともこれを習慣にしたいと思う。日中はとにかく余計な事柄や情報に気を取られないようにする。早朝から夕食後の時間帯は、全て自分の取り組みのためだけに時間を使う。そして、そうした時間の中で今の自分が納得することを積み重ねていく。作曲実践においても読書においてもそうだ。納得のいく形でそれらをゆっくりと前に進めていく。

今の自分が関心を持っている事項を納得のいく形でゆっくりと探究を進めていけば、自分の内側がゆっくりと成熟していき、自分の感性も少しずつ開いていこう。そのような形で涵養された唯一無二の感性から生み出される自分なりの音を大切にしていきたい。そこに自分なりの正しさがあり、そこから生み出される音は、自らを癒し、自らを育てていく。フローニンゲン:2020/3/24(火)21:03

5655. フランソワ・クープランと作曲家の身体感覚のトレース

時刻は午前6時を迎えた。今朝は5時過ぎに起床し、起床と共に寝室と書斎の窓を開けると、小鳥たちの鳴き声が聞こえて来た。彼らは今も澄み渡るような鳴き声を上げてくれている。家の間取りの都合上、日中は書斎に太陽の光が差し込み、朝は寝室から朝焼けが見える。先ほども少しばかり寝室から朝焼けを眺めていた。薄ピンクあるいは薄オレンジに輝く朝焼けはとても美しく、街の中心部にある教会を照らしていた。

起床直後のオイルプリング、歯磨き、ヨガの実践、音楽に合わせた踊りを終え、今このように日記を綴っている。いつも歯磨きをした後に一杯の白湯を飲み干し、踊りを終えてから日記を書いている最中にチアシードと小麦若葉をブレンドした飲み物を飲んでる。小麦若葉のデトックス力は強く、それを飲むと、腸内が活発に動き始める。

昨日、腸内細菌は毎日接する身近にいる友達だとふと思った。実際には、自分と一心同体の存在だと言えるかもしれないが、一応それらを客体化させることが可能であり、彼らにも固有の意識がありそうなので友達として分別している。とは言え、彼らの状態如何によって自分の心身の状態が大きく左右されるため、友達である腸内細菌を引き続き労ろうと思う。彼らに対する優しさが、自分に対する優しさとして還ってくる。

つい先ほどパソコンのソフトウェアのアップデートを行い、しばらくパソコンが使えない状態となり、今再び日記の執筆に戻って来た。

昨日、作曲理論の正しさはアприオリ的に決定されるものではないということを考えていた。それは空(くう)のように変化する。音と音の関係性の中で正しさはダイナミックに変化するのである。

作曲プロセスの中で、その正しさ、しかも自分の中の正しさを探求していく道を歩んでいく。言い換えれば、作曲過程の中で、絶えずその瞬間瞬間に正しさを見出していくということである。

私たち一人一人に何かしらの役割があるのと同じように、一つ一つの音にも何かしらの役割がある。そして、一つ一つの曲においても同様のことが当てはまる。一つ一つの曲に意味と役割を持たせることをより意識して本日も作曲実践に励みたい。

昨日、作曲理論書に掲載されているフランソワ・クーブランの楽曲が大変面白かった。今後は彼の音楽も参考にするために、2冊の全集楽譜を購入することにした。フランス様式とイタリア様式の統合を実現させたクーブランは、バッハ、ヘンデル、テレマンといった巨匠たちに大きな影響を与えた。また、ドビュッシーとラヴェルもクーブランを大いに賞賛していたことを知り、ますますクーブランに関心を持った。来月初旬に書籍を注文する際にクーブランの楽譜を合わせて購入し、今後はクーブランの曲を用いて原型モデルを作成し、そこから曲作りをしていくという新たな楽しみが加わった。

今朝起床した瞬間に、作曲家の身体感覚をトレースすることをもう少し意識してみようと思った。いつも述べているが、作曲の技術は書物から学ぶことはできない。できることは概念的な理解に留まり、作曲という知的身体運動を行うためには、その運動に必要な感覚を養って行かなければならない。

ここ最近力を入れていることとして、過去の作曲家の曲を作曲ソフト上で一度再現するという実践があり、それはまさに音を配置していく過程の中で、作曲家当人の身体感覚をトレースすることに他らなれないと思った。引き続きこの実践を継続させていき、偉大な作曲家たちが体現したのと同じような身体運動が作曲空間の中で行えることを目的にする。そして、そこから自分なりの作曲身体表現技法を見出していこう。フローニンゲン:2020/3/25(水)07:04

5656. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えた。辺りはすっかり明るくなり、ほのかな朝日が赤レンガの家々を照らしている。

今日は平日の中間の日だが、相変わらず道ゆく人たちの姿は少ない。小鳥たちが引き続き澄み渡る鳴き声を上げており、それに耳を傾けながら今朝方の夢を振り返ることにしたい。

夢の中で私は、大学時代のクラスメート2人と話をしていた。彼らは共に法学部に所属しており、私と所属学部は違ったが、2人ともとても優秀であり、卒業後はロースクールを経て弁護士になった。彼らと話をしていたのは、どこかのレストランの中だった。夢の中の私たちはまだ学生であり、学部は違えど、お互いに履修している授業について話をしていた。

すると、また1人別のクラスメートがやって来て、彼も話に加わった。彼は私と同じ学部所属しており、とても真面目に授業を受けており、成績も良かった。ちょうど私は、彼と同じ授業を履修していて、その課題に関して彼に助けてもらおうと思った。その授業は経済学に関するものであり、課題が難解な数学と統計的処理を含むものであり、彼はそうした事柄に精通していたので、課題を手伝ってもらうことにした。実際のところは、私はもうその授業も課題も面倒だったので、課題は全部彼にやってもらおうと思っていた。その旨を彼に伝えると、特に何の問題もないとのことだったので、課題を彼に任せることにし、彼はその場を後にした。

その後、引き続き2人の友人と話をしていると、同じ大学なのだが見知らぬ後輩たちが私たちに声を掛けて来た。それを受けて、私は彼らに2人の友人を紹介しようと思ったのだが、2人の下の名前をごっちゃにしてしまい、おかしな呼び名で彼らを紹介してしまった。すると2人は、幾分呆れ顔を浮かべながらも笑顔で、「俺たちの名前をちゃんと覚えてないの？」と述べた。私は笑いながら謝罪し、正しい名前を後輩たちに伝えた。

後輩たちは10人ぐらいいたので、いくつかのテーブルに分けて座ってもらうことにし、彼らは就職活動中とのことだったので彼らの話を聞くことにした。私のテーブルには、2人の後輩が目の前に座っていて、彼らの話を聞くことになった。どのような会社を訪問しているのかを尋ねてみると、私の目の前に座っていた後輩は農業関係の会社を訪問しているらしく、とても興味深く思えた。私たちの大学の就職先からすると、それは珍しかったのだ。話を聞いてみると、その会社に入社しているのはもちろん難関大学の卒業生もいるが、それよりも研究に特化した理系の大学の卒業生が多いとのことであった。その後、入社面接について話を聞いてみると、なんと面接官から仏舎利の意味と意義について尋ねられたそうだ。それはかなり面白い問いであり、後輩がどのように回答したのかを尋ねて

みた。すると、その後輩は事前にかなり念入りに仏教について調べていたらしく、とても深い回答を彼が行ったことに驚いた。

自分であればどのように回答するかを考えてみた時に、私の回答よりも優れた回答を後輩が行えたことは驚きであった。彼の話聞き終えると、何人かの後輩たちがこれから授業があるらしく、その場を後にし始めた。テーブルを見ると随分と食べ物が残っており、それらは欧米式に誰かが持ち帰った方がいいのではないかと思った。その前に、私は後輩たちの話を熱心に聞いていたのでほとんど何も食べておらず、テーブルに残ったものを少し食べてからレストランを後にしようと思い、各テーブルを回って、残り物を皿に取っていった。

普段は食べないスクランブルエッグやチーズなどを乗せたところで、支払いのタイミングとなり、その場は一括して私が支払うことにした。その場には高級取りの弁護士である2人の友人がいたが、私は投資家として成功していたため—3人とも学生でありながらもそれぞれの個性を活かして稼ぎを得ていた—、「支払いは累進課税式で(笑)」と冗談を述べ、後輩には一銭も出させることなく、そして2人の友人にも一銭も出させることなく支払いは全て自分が受け持った。

するとそこで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は自宅のマンションにいた。場所はどうかや日本のものであり、そのマンションは東京にあるように思えた。マンションの自室には、小中高時代から付き合いのある女性友達(YY)がいた。その他にも、大学の後輩たちが何人かいて、そこで談笑をしていた。

時計の針を見ると、もうそろそろ就寝時間が迫って来ていたので、会はこのあたりでお開きしようとして述べた。すると、なぜか最後にカラオケをしないとその女性友達が述べ、部屋の一角がカラオケルームと化し、カラオケが始まった。カラオケが始まると長くなりそうだと危惧した私は、自宅を飛び出して、実家に戻ろうと思った。自宅を後にすると、ちょうど1人の後輩も帰宅するところだったので、一緒に歩いて駅まで向かうことにした。

すると突然雨が降り出し、傘を持って来ていなかったので困ったことになった。そして私は、明日の大学の授業で必要なテキストなどが自宅にあることに気づき、それらを取りに帰る必要があると思った。そこで後輩と別れ、私は再度自宅に戻った。自宅に引き返し、マンションのエレベーターのス

イッチを押し、エレベーターの中に入った。私が住んでいたのは9階なのだが、なぜか8階のボタンを押してしまい、それを取り消すかのようにもう一度ボタンを押したところ、今度は10階のボタンを押してしまった。そこから再度8階を取り消し、9階のボタンを押した。フローニンゲン:2020/3/25(水)
07:30

5657. 光合成を始める身体:素晴らしき1日の終わりに

穏やかな1日が今日も終わりに近づいている。ここ最近では、コロナウイルスの蔓延という不吉な事態とは裏腹に、天気がすこぶる良い。フローニンゲンの街を歩く人はほとんどいないが、外で人とすれ違う際には、皆天気の良さを喜んでいる様子が窺える。今日も午後の仮眠の前に日光浴を楽しんだ。

ふと、自分の身体は光合成を行う能力を身につけ始めているのではないかと思った。これは幾分突飛な発想かもしれないが、この1年間肉類を一切食べておらず、植物性のものばかりを食べて来たため、植物のように光合成ができる能力が自分の中に芽生え始めているように思える。その起点になっているのが自分の腸内細菌であり、彼らが植物性の食べ物を養分にすることによって、まずは彼らが光合成の能力を手に入れたように思える。

日光浴の際には意識せずともおへそ辺りに太陽の光を当てることを行っており、そう言えば、それは道教の身体養成技法の一つであることを思い出した。現在の自分の腸内細菌の特性から考えると、おへそ辺りに太陽光を当てるというのはとても理にかなっているように思えた。今後光合成の力が高まれば、極端な話、水と太陽の光だけで十分エネルギーを生成できるのではないかと思ってしまう。そうなると、本当に植物だ。人間の脳が植物由来の種々の物質に反応し、意識が変容することは広く知られていることであるが、ここからも、人間の脳の根幹には植物的な何かがあり、今自分の中でそれが目覚めようとしているように思えてくる。そのようなことを考えていた。

本日の昼前に、無事にアテネ行きフライトのリスクを行うことができた。ギリシャの航空会社に電話をし、しばらく待った後にオペレーターとつながった。担当してくれたのは女性の方であり、迅速かつとても良心的な対応をしてくれた。すでにホテルの予約を変更しており、その日程に合ったフライトを確保することができたのは幸運であった。時間に関しても以前予約したのと同じ時間帯であり、

アムステルダムを出発する便にせよ、アテネを出発する便にせよ、どちらも正午過ぎのものである。早くも遅すぎもしない素晴らしい時間帯のフライトを確保することができ、私は感謝の念をオペレーターに伝えた。

私は小さなことでも幸福感を感じたり、大きく喜んでしまう傾向にあり、望むようなフライトを確保できた時に、思わず喜びの声を上げ、オペレーターの女性も笑っていた。私はオペレーターの方の名前を聞き、彼女の名前を呼んだ後に、再度お礼を述べた。担当してくれたのは、アレクシアさんという方であり、最後はお互いに笑って別れた。コロナウイルスの渦中にありながらも、どこか幸せを感じさせてくれるやり取りだった。

作曲実践を一通り終えた夕方に、街の中心部にあるABN AMRO銀行に行き、所用を済ませた。銀行も近所のスーパーと同じように、プラスチック張りの仕切りが設置されており、対応してくれた男性と仕切り板越しに会話をした。

銀行で所用を済ませた後に、オーガーニックスーパーに立ち寄った。今日もメイが元気に働いており、彼女に挨拶をした。彼女はいつもにこやかに笑顔を浮かべて働いており、その様子だけで性格がとても良いという印象を受けるが、実際に話をしてみると、本当にその通りであることがわかる。以前彼女が話をしていたように、新たな楽器としてピアノの演奏を始めることと、歴史を学ぶことが実現されることを願う。

店を後にした私の足取りはとても軽く、住宅地を歩いている時には、小鳥たちの鳴き声が聞こえて来て、彼らの鳴き声には随分と癒された。オランダはそこが街であっても、様々な小鳥たちが住んでいて、その澄み渡る鳴き声が聞こえてくる。そんな環境を私は好ましく思う。

帰り際も行きと同様に、あまり思考が脳内に浮かばず、どこか無心で歩いている自分がいた。そのおかげで頭がクリアになり、これが散歩の効用なのだということを実感した。思考が浮かんだとしても、それに囚われることなく、できるだけ言語脳を休ませることが散歩の良さなのだろう。

今日も本当に良い1日だった。明日がどのような素晴らしい日になるのかを期待しながら、本日をゆっくりと終えていきたい。フローニンゲン:2020/3/25(水)21:03

5658. 麗かさを感じる日々：AIと作曲及び絵画

時刻は午前6時を迎えた。今、小鳥たちが朝の喜びの歌を歌っている。彼らの鳴き声が、寝室と書斎の窓を通して聞こえてくる。この時間帯になると辺りはすっかり明るくなって来ており、今週末の日曜日からいよいよサマータイムに入るという実感が湧いてくる。

薄ピンク色の朝焼けの輝きと香りはとても優しい。サマータイムを迎えようとしているフローニンゲンには、連日天気がすこぶる良い。今日も快晴のようであり、これまでの雨ばかりが降る鬱蒼とした世界が嘘のようである。空を不気味に覆っていた雨雲を眺めることが常であったが、そうした雨雲が存在していたことが今では嘘のように、空は毎日晴れ渡っている。現在世界を覆っている不穏な雰囲気もできるだけ早く払拭されて欲しい。

現在の気温は0度と、気温の面ではまだまだフローニンゲンは冬である。今週末からは最高気温がまたしても10度を下回るようになり、最低気温に関してはマイナスになる日もあり、0度近くの日が続く。こうした気温が5月の半ばまで続くというのがフローニンゲンの気候である。相変わらず気温が低いのだが、最近はまだヒーターを使わなくて良くなっている。というのも、日中に太陽の光が部屋に差し込むことによって、室内の温度が上がっているようなのだ。

早朝においても、昨日の部屋の暖かさのおかげでそれほど寒くなく、早朝にヒーターをつける必要も感じていない。太陽の恩恵というのは、何も日光浴をすることや椎茸を天日干しすることだけではなく、こうした側面においてもあるのだということを実感する。

今朝もまた、1日の作曲実践を楽しみに目覚めた。作曲実践をするために起き、作曲実践をするために寝るという日々が続いている。そこでの楽しさは、幼少期にゲームに熱中していたのと同じような感覚を持っている。ゲームの大半は終わりのあるものが多いが、作曲には終わりが無い。この点もまたより一層作曲にのめり込ませる要素の一つかと思う。

毎日曲を作るたびごとに新たな発見があり、新たな喜びがある。こうした発見や喜びというのは、絵画制作などの他の芸術活動においても存在しているのではないかと思う。日々新たな発見や喜び

を体験している人はいつまでも若く見えるというのは、脳や心身の特性から考えると不思議なことではないだろう。

昨日、作曲とAIとの関係性について考えていた。将棋やチェスの世界ではAIの活用が進んでおり、どうやら作曲の世界においてもAIの活用や研究が進んでいるようだ。AIが作曲を行うことはもう可能になっているのだが、ふと絵画はどうなのだろうかと考えた。もちろん絵画もAIを搭載したロボットが描くことができるのかもしれないが、今のところ人を感動させるような絵画の制作に関しては、AIがそのような絵を描く姿をあまり想像できない。

作曲は、抽象的な音楽空間上での身体運動であるために、AIも作曲が比較的容易なのかもしれないが、絵画の場合は物理的世界での身体性も伴うため、作曲よりも難易度が上がるのかもしれない。一方で、デジタルアートであれば、物理次元の制約を気にする必要がないために、デジタル空間であればAIもその力を発揮して絵画を描くことができるかもしれない。そのようなことを考えており、作曲において、AIでは作れないような曲を作っていく道を模索していく必要性を感じていた。フ
ローニンゲン:2020/3/26(木)06:33

5659. 理論書との付き合い方の変化

このところは、作曲の理論書との付き合いが上手くなって来たと自分でも感じる。どのような分野の探究をする時でも、私はその分野に関する大学院レベルや研究者レベルの書籍を大量に読むようにしている。関心を持った分野であれば、自分の事前知識とは関係なく、とにかくそうしたレベルでの学術書を大量に購入し、それと向き合う中で理解と関心を育んでいる。それは作曲においてもそうであり、少なくとも大学院で扱うようなテキストを購入し、時にはその道の研究者でさえ持っていないような学術書を購入し、それらを通じて自ら探究を進めている。

このところは、ウォルター・ピストンが執筆したハーモニーに関する書籍、そしてアーノルド・ショーンバークが執筆したハーモニーに関する書籍を参照しながら曲を作っている。昨日からはハーモニーに加えて、フーガの技法に関する学習を進めていこうと思い、アルフレッド・マンの“The Study of Fugue”を参照しながら曲を作っていくことにした。上述の全ての書籍は、過去に一読をしているのだが、その時には文字面を追いかけるだけであり、実際に譜例を作曲ソフト上で再現するというこ

とや、譜例をもとに作曲をするという実践が欠けていた。端的には、身体運動を通じた学習が欠落していたのである。

作曲というのは、知的身体空間における運動に他ならないのだから、そうした学習をいつまでしても上達が見込めないのは当然である。その点をここ最近では常に肝に銘じており、とにかく手を動かすようにしている。すると、その手を動かすということそのものが喜びをもたらし、その結果として生み出される音に対してもまた喜びを感じるという良い循環が生まれている。

今日もまた、過去の偉大な作曲家たちが運動を行っていた音楽空間にアクセスし、そこで行っていた彼らの運動をトレースしていく。彼らが見ていたであろう音楽的景色や、彼らを感じていたであろう音楽的感覚を追体験することの喜びはえも言えないほどに大きい。今日もまた一日中作曲と向き合い、楽しさと喜びの中に浸り切ろうと思う。

時刻は午前6時半を過ぎ、柔らかな朝日が赤レンガの家々の屋根を照らし始めた。先ほどまで見えていた薄ピンク色の朝焼けは消え、今はすっかりライトブルーの空に変わっている。

今朝方もまた印象に残る夢を見ていたが、起床と共にその記憶が消えてしまった。確か、小中高時代の友人(SS)が夢の中に登場していて、彼と何かの分野に関して意見交換をしていたのを覚えている。それがどのような学問分野だったのかは覚えていないが、自分の主専門ではなく、副専門、ないしは副副専門ぐらいの分野だったように思う。

それ以外に覚えていることとしては、おそらくオランダ人であろう数人の外国人たちとカフェかどこかで会話を楽しんでいたのを覚えている。いやそれはカフェではなく、オフィスビルの中だったかもしれない。いずれにせよ、和気藹々とした会話を彼らと行なっており、何かのテーマについて私から彼らに教える場面があったように思う。今朝方の夢で覚えていることはそれぐらいだろうか。

それでは、今から早朝の作曲実践に取り掛かりたい。今日は特に協働プロジェクト関係の仕事もないので、一日中作曲実践をしたり、作曲に関する学習を進めていく。もっと膨大かつ集中的に作曲に打ち込みたいという思いが日増しに強くなる。フローニンゲン:2020/3/26(木)06:53

5660. 頭を空っぽにすること:メンデルスゾーンと小鳥たちの鳴き声

時刻は午後8時半を迎えた。今日もまた静かに終わりに近づいている。

今日は午後、頭を空っぽにする時間を持つことの大切さについて考えていた。それは昨日街の中心部のオーガニックスーパーに立ち寄った際の散歩の最中に体験していたことであり、頭が空っぽになったような脳の状態及び意識状態を作ることが、心身に良い影響を与えていることを実感していたのである。そうしたことから、今後はより一層その状態を意識してみようと思う。空っぽの容器でなければ水を入れることができないように、脳は適宜空っぽにするような感覚で休息をさせることが必要なのだ。

読書にせよ作曲実践にせよ、そこでは情報データが自分の内側に流入していることは間違いないので、そうした活動に従事する際には、適宜頭を空っぽにする時間を設ける。今後は、日常のふとした時にそうした状態にすっと移行し、スイッチをいつでも切り替えられるようにしていく。言い換えれば、いつでも脳を休息させることと活動に向けてフル稼働させることの双方が行えるように状態移行の鍛錬を積んでいく。

午前中に作曲実践をしているときに、今から4年前に訪れたライブチヒのメンデルスゾーン博物館の一室での体験を思い出した。あの日の私は、何かに取り憑かれたように『真夏の夜の夢』をその部屋に置かれていたオーディオを通して延々と繰り返し聞いていた。

その後、売店に立ち寄った時、部屋に監視カメラがあったのか、長時間にわたって同じ曲を繰り返し聴いていたことの原因を店員から尋ねられたことを思い出す。ライブチヒを出発して以降は、シュツットガルトとスイスのニューシャテルに移動したのだが、その旅の列車の中でも、ダウンロードした『真夏の夜の夢』を繰り返し聴いていた。その時の記憶がなぜ今思い出されたのかわからず、なぜあの時の私はその曲を繰り返し聴いていたのだろうか。メンデルスゾーンへの関心が少しずつ高まっていく。

絵画の才能もあったメンデルスゾーンは、30代の後半でこの世を去った。早熟の天才であるメンデルスゾーンから何か学ぶことができそうだ。折を見て、手元にある彼の楽譜を参考にして曲を作ってみよう。

毎朝聴こえてくる鳥の鳴き声に関して、鳥たちはなぜ朝から鳴き声を上げているのだろうかと気になって調べてみた。すると、朝方オスが鳴き声を上げるのは、自分の健康状態をメスにアピールするためだという微笑ましい理由を知った。

鳥たちは主に日中に餌を取るらしく、夜明けの時間帯は一番空腹で力のない時間帯とのことである。そのような時間帯の中で力強く鳴くことによって、オスはメスに自分の健康度合いをアピールしているらしいのだ。それを知ると、明日から小鳥たちの鳴き声が違って聞こえてきそうだが、彼らの鳴き声に癒されるだけではなく、逆にそうしたアピールをしている小鳥たちを応援したいという気持ちも芽生えてくる。明日からどのような気持ちで小鳥たちの鳴き声を聞くことになるのか、今から非常に楽しみである。フローニンゲン:2020/3/26(木)20:47